

市政ニュース

豊岡市第2次外国人漁業技能実習生

修了証授与式を挙行

6月24日、市役所で豊岡市第2次外国人漁業技能実習生修了証の授与式を行いました。

修了証を受けたのは、インドネシア人のナナンさん、エディ・スサントさん、ルクマイン・ハキムさん、スチ・ブデン・プラステイヨさん、エルウィン・ロムパスさんです。

5人は、豊岡市外国人漁業研修生受入事業の第2次実習生として、市内で3年間にわたり、

沖合底曳網漁業にかかると研修および技能実習に励みました。今後、日本での実習を生かし、インドネシア漁業の発展に貢献されるものと期待しています。



▲代表謝辞を述べたスチ・ブデン・プラステイヨさん(左)とエディ・ロムパスさん

市内3例目

奥小野線「チクタクひばこ」スタート

「チクタク」は市の支援を受けながら、地元関係者で構成する運営協議会が主体となり運行する地区の乗合タクシーです。

7月13日、奥小野線を運行する「チクタクひばこ」の出発式が行われ、第1便が出発しました。



新潟県三条市への東日本大震災避難者へ 支援物資を送り、礼状が届きました

■三条市の避難者を支援

新潟県三条市では、東日本大震災発生直後から、福島県南相馬市を中心とした避難者を受け入れており、仮設住宅や避難所で、今なお多くの方々

が避難生活を送っています。三条市と豊岡市は、互いに激甚な水害を経験したことから、全国の市町長が集まり、教訓や治水への思いを語り合う「水害サミット」の発起人となっています。

このたび、兵庫県米穀小売商業組合但馬支部から、「減農薬特別栽培米豊岡産こしひかり」提供の申し出を受けました。

市では、この米と購入した野菜に中貝市長のメッセージを添えて、三条市で避難生活を送る約120世帯に向け、6月29日に発送しました。

また、三条市の避難所で7月2日に開催される被災者交流イベントに合わせ、但馬牛肉10キログラムも送りました。■三条市長、避難者からのお礼支援物資を受け取った方々

から礼状が届きました。

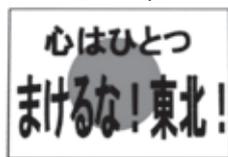
「孫の代になっても受けたご恩を忘れないように。いつの日か、孫にコウノトリに会いに行ってほしい」心温かい最高の贈り物が届きました。4月にはランドセルをいただき、重ねてお礼申しあげます」豊岡のコウノトリが日本の復興、私たちが故郷に帰れることを願ってくれています」などと、感謝の気持ちが綴られていました。

7月6日には、三条市議会の下村喜作議長が来訪され、(にぎやま) 國定勇人市長からのお礼のメッセージを届けられました。

■応援ステッカー作成

市消防本部では、被災地の一日も早い復興を願うとともに同志(消防士)への哀悼の意を込めて、「心はひとつ 負けるな!東北!」応援ステッカーを作りました。

ステッカーはヘルメットに貼付するとともに、宮城県内の12消防本部にも送りました。



主な市政の動き

〔6月〕

17日 出石(つるみはし)見橋開通式

18日 小学校教室への扇風機設置(30日、日高・八条・府中・豊岡小学校)

22日 南ソウル大学が環境学習で来訪(24日)

29日 東日本大震災に係る三条市への避難者へ支援物資発送(30日)

〔7月〕

3日 とよおか こころの元気あつぷエスタ2011

4日 いのちのつながりを考える集い(7・8・11・12・21日)

豊岡観光フェア in TAIANAI (タイナアイ) STATION & SHOP (東京都) OP(東京都)

7日 豊岡エキシビジョン2011(東京都)

8日 豊岡市アンテナショップ「コウノトリの恵み豊岡」オープン(東京都)

11日 全但バス「神鍋線、1回乗ってこ!!キャンペーン」(18日)

地域の生きものを知ろう！

「出張！田んぼの学校」を展開

市では、子ども会や公民館の行事などを対象に講師を派遣し、身近な自然を相手に生きもの調査などを行う「出張！田んぼの学校」を展開しています。費用負担は不要（コウノトリ基金活用）で、道具も貸し出します。

6月は港地区と福住地区で実施しました。

目を輝かせ、夢中で生きものを探す子どもたちは、昔も今も同じ。ビオトープや川によって生きものは異なるため、



▲奥山川での調査

どんな種類がいるのか調べることは、より地域のことを知るきっかけになります。ぜひ、「出張！田んぼの学校」を活用ください。

城崎温泉駅⇕

ハチゴロウの戸島湿地

⇕玄武洞公園の

路線バス運行

7月2日から、城崎温泉駅⇕ハチゴロウの戸島湿地⇕玄武洞公園を結ぶ路線バスが、土・日曜日、祝日に6便（3往復）運行しています。

これにより、城崎温泉を訪れる観光客などが、近隣の円山川東部の観光スポットに容易に足を延ばせるようになりました。運行初日には出発式を行い、第1便には、市のマスコット「玄さん」も乗車しました。

コウノトリ但馬空港開港から17年、

但馬—大阪路線搭乗40万人達成

7月9日、コウノトリ但馬

空港開港（平成6年5月18日）以来の但馬—大阪路線の搭乗者数が40万人を達成しました。

40万人目となったのは、コウノトリ但馬空港午後5時40分着の夕方便に搭乗していた関 美智子さん（東京都杉並区）。初めて但馬を訪れた関さんは、記念セレモニーで花束と記念品を贈呈され、とて

も喜んでいました。

平成22年度の搭乗者数は2万7995人で、うち、伊丹空港で羽田空港との乗り継ぎ便を利用した方は、過去最高の9923人です。東京乗継利用者は、近年増加し、5年連続で過去最高を更新しています。

コウノトリ但馬空港は、但馬と大阪、そして東京・全国

を結ぶ大きな役割を担っています。



▲40万人搭乗を祝福(左から5人目が関さん)

中貝市長の徒然日記 ④

被災地への旅（一）

被災地に行ってきました。南三陸へ向かう途中、思い立って、気仙沼の唐桑に足を延ばしました。畠山重篤さん

を見舞うためです。あのとき、孫を抱いて裏山を駆け上がり無事であったことは、新聞記事で知っていました。

森の栄養が海の生きものを支えている、だから「森は海の恋人」。カキの養殖を通じてそのことに気付いた畠山さんから「新しく作りました」「海は穏は植林活動を続けておられませんか。20年前、畠山さんを訪ね、にもなくなっちゃって」

その後、豊岡で講演をしていただいたこともあります。数年前、農林水産省の生物多様性戦略策定委員会に招かれたとき、畠山さんも一緒でした。畠山さんの言葉です。カキの久しぶりの再会でした。「コウノトリが空に舞いました」「こちら海が復活しました」

お互いの健闘をたたえあい、お互いの健闘をたたえあいました。その気仙沼があつた害です。山道を上り、今度は港に着きました。集落や加工場などがあつたはずなのです

が何もありません。何艘かの船が岸壁につながれ、湾内には筏が浮かんでいました。カキの種付けの作業も始まりました。残念ながら、畠山さんは出張中でした。

しばらくすると、船が帰って降ります。「畠山さん？」息子さんでした。船を守るため沖へ向かい、第一波に遭って海に飛び込み、島に流れ着いて助かっていました。

「あれはカキの筏ですね？」

「豊岡の人は、コウノトリがっかり見ている。コウノトリの育つ下地を見ないと、将來はないですね」。16年前の畠山さんの言葉です。カキの育つ下地、森と海。荒れ狂った海の端で、それでも海とともに生きていこうとする、懸命の作業が始まりました。

